

マタイ 5・17-37

先週の日曜日に続いて今日のミサにおいても、山上の説教のみことばが響いています。他の福音書には出てこないこの山上の説教の部分には、最初の教会に伝えられていたイエスのみことばを集め、一連のイエスの説教としてまとめて示そうとした、マタイ福音書の意図が働いていると現代の聖書学は説明しています。そのような最初の教会の、後に続く世代のために福音書という書物を残そうとした努力のおかげで、私たちはイエスの教えをまとまった形で聴くことが出来るようになったのです。

伝えられたイエスのみことばを集め、それらを山上の説教にまとめたマタイ福音書を生み出した最初の教会の意図は、今日の福音の初めに語られているイエスのみことばに基づいていると考えられます。もう一度、今日の福音の最初のイエスのみことばに注目すると、イエスはこのように語っておられます。「わたしが来たのは律法や預言者を廃止するためだと思ってはならない。廃止するためではなく、完成するためだ」。マタイ福音書を生み出した最初の教会が私たちに伝えようとしているのは、このようなイエス・キリストへの信仰です。イエスは、旧約のモーセや預言者たちを通して示された神の掟に徹底的に従って生きることによってそれを完成させたお方です。イエスは御自分が生きられた神の掟に従って生きる道を私たちに示し、私たちにそのような生き方に招くためにこれらのみことばを語っておられるのです。

今日の福音で、モーセの十戒の中の一つ一つの掟のことばをあらためて指し示しながら、「しかし、わたしは言うておく」と言われるイエスの語り方は、人々に新鮮な驚きをもって受け止められたはずです。人々の心に残ったイエスの語り方の最も際立った特徴は、イエスが権威をもって語られるということです。マタイ福音書は山上の説教という形でイエスのみことばをまとめるにあたって、人々の心に刻まれた、イエスのことばが放つ権威をこれ以上にはない形で強調します。「しかし、わたしは言うておく」というみことばによって、十戒の掟の真の意味を解き明かすイエスの権威は、イスラエルの民に神からの掟としての十戒を与えたモーセの権威をはるかに超えたものであるとマタイ福音書は主張しているのです。イエスのこれらのみことばが山上の説教としてまとめられていることにも、そのようなマタイ福音書の意図が示されています。モーセがシナイの山で主なる神から十戒の掟を受けて、それをイスラエルの民に伝えたことを念頭において、イエスは今や、モーセを越えた権威ある者として、山上の

説教の山から語りかけられるのです。そればかりではありません。モーセを通して示された神の掟に従うと誓うことによって神の契約に与り、神の民とされた旧約のイスラエルの人々に替わって、今やイエスは、人々に十戒の掟の真の意味を解き明かし、御自分の権威をもって確認することによって、新約の新たな神の民となる人々を、御自分との契約に招き入れようとしておられるのです。要するに、私たちが今日も聴いたイエスのこれらのみことばは、私たちにイエスへの信仰を要求しているのです。イエスを道、真理、いのちと信じる者たちにとって、イエスが語られるこれらのみことばは、それにしたがって生きるべき新約の新しい掟となるのです。

今日の福音に響くイエスのこれらのみことばが私たちを圧倒するのは、その激しい語調のひと言ひと言に込められた、神の掟に対する徹底的な肉迫ぶりです。神の掟の求めに対する、日常の生活の隅々にまで及ぶその徹底的な従順の姿勢です。イエスのこれらのみことばの前に、私たちは今日も自分自身を振り返らなければなりません。けれども、その私たちの反省は、イエスがここで命じておられことに従えているかどうかということに向けられるものではありません。むしろ、これほどの迫力をもって私たちに迫るイエスのみことばが私たちにどれほどの衝撃を与え、私たちのうちにどれほどの波紋となって広がっているかということこそが肝心なのです。

「わたしは天と地の一切の権能を授かっている。だから、あなたがたは行ってすべての民をわたしの弟子にきなさい。彼らに父と子と聖霊の名によって洗礼を授け、あなたがたに命じておいたことをすべて守るように教えなさい」。マタイ福音書の最後に記されている、復活されたイエスのみことばです。イエスのこのみことばによって派遣された弟子たちの宣教によって誕生した教会の中で洗礼を受けイエスの弟子とされた私たちに、今日もイエスは山上の説教のみことばによって語りかけておられます。イエスの弟子として「わたしは世の終わりまでいつもあなたがたとともにいる」と言われるイエスのこれらのみことばのもとに留まり続けたいと思います。

イエスは私たちをこれらの掟のもとに縛りつけ、これらの掟によって私たちを裁くために、ファリサイ派の律法学者のように、モーセの律法の権威によってこれらの掟を教えておられるわけではありません。イエスは律法学者やファリサイ派の人々の義にまさる道によって私たちの天の国に招き入れようとしておられるのです。イエスはひたすらに父なる神の御心を求め、それに従い通された神の子としての御自分の生き方に私たちを招き入れようとしてこれらのみことばを語ってくださったのです。

イエスのこれらのみことばを、自分たちの普段の生き方とは相容れない厳し

い求めとして、私たちの心のどこかに反感を隠して聴くのではなく、イエスが求めておられるように、素直な柔らかな心で受け入れることが出来るためには、山上の説教のイエスの最初のみことばを思い起こさなければなりません。山上の説教の最初の幸いを告げるおことばの中で、イエスは「悲しむ人は幸いである」と語りかけておられます。今日のイエスのみことばの前に立つ時、私たちの心にまず湧き起こってくる思いは悲しみでなければならないことを、イエスの最初のみことばは私たちに思い起こさせます。イエスが示してくださる新しい掟の道を知りながら、それに従いきれない悲しみを私たちはいつも自分のうちに感じていなければなりません。そのような悲しみに私たちが真に向かい合う時、私たちは心砕かれた者となり、心貧しきものとなる事が出来るのです。そのようななれたとき、私たちはイエスが求めておられるように、お互い同士兄弟となって、自分の非を認め、ゆるしを乞う者となる事が出来るのです。そうなる事が出来れば、お互い同士和解しあうことが出来、私たちが本当に望んでいるはずの平和を実現してゆく道が開かれるのです。自分の正しさを擁護してくれる神を求めて、誓いによって神を引き合いに出してでも自分の正しさを主張するのではなく、神の大いなる憐れみの広がりの中に生きる者同士であることに目覚め、互いに兄弟同士としての平和のあいさつを交し合う者たちとされてゆくのです。そのためにも心清きものとなってひたすらに神に目をあげ、その視線を曇らすものは、なんであれえぐり出し、切り捨てる覚悟をもって、イエスが招く神の子らの生き方に合流して行きたいと思います。イエスが求めておられる生き方に反していることに気づくたびに、深い悲しみの中にも、そのことによって自分の小ささ、自分の貧しさに気づかせていただけたことに感謝し、真の幸いを約束するイエスの掟のもとに、幼子のようになって神の子らとして生きる喜びを噛み締めてゆく恵みを願いたいと思います。

カトリック高円寺教会
主任司祭 吉池好高